

令和8年度全国学力・学習状況調査の結果について

報告内容

令和8年度全国学力・学習状況調査の港区の結果について報告いたします。

1 調査概要

- (1) 実施日 令和8年4月23日(木)
- (2) 調査対象 小学校第6学年児童及び中学校第3学年生徒
- (3) 調査内容

① 小学校第6学年 国語・算数・児童質問紙

② 中学校第3学年 国語・数学・英語・生徒質問紙

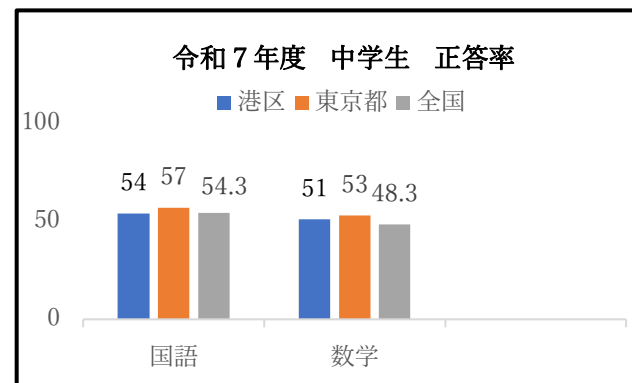
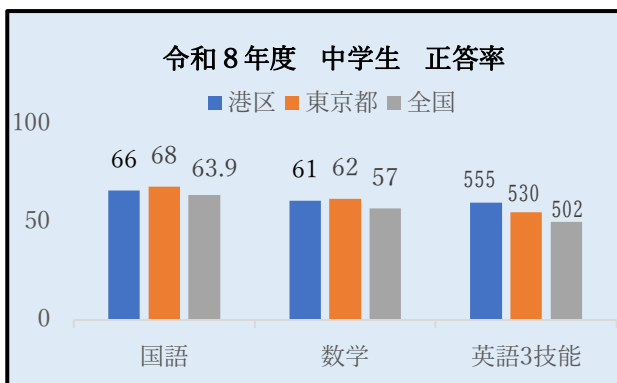
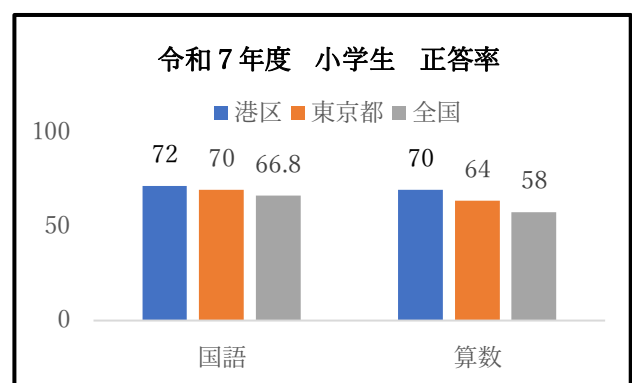
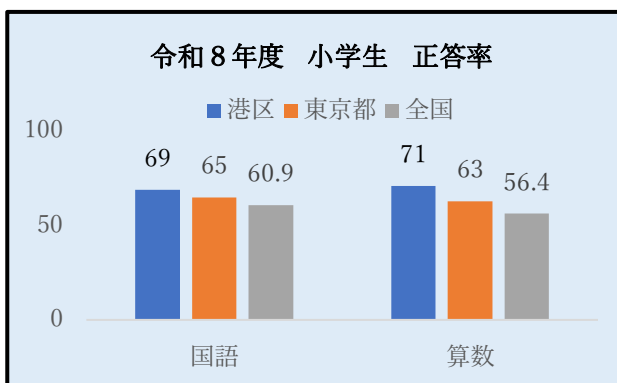
※質問紙は、調査対象の児童・生徒の学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査(小学校73問、中学校80問)

※中学校の英語は、昨年度よりコンピューターで行う CBT (Computer Based Testing) 方式が導入され、採点方法が変更された。平均正答率ではなく、平均 I R T スコアでの表記である。

平均 I R T スコアとは、項目反応理論 (I R T) に基づいて算出された、ある集団の能力 (学力など) の平均値で、全国平均を 500 とした場合に、個々の集団や個人の学力が全国平均と比べてどの程度のレベルにあるかを具体的に表すものである。

2 教科に関する調査結果

(1) 概要



【小学校】

- ・国語は東京都を4ポイント、全国を8.1ポイント上回っている。
- ・算数は東京都を8ポイント、全国を14.6ポイント上回っている。

【中学校】

- ・国語は東京都を2ポイント下回り、全国を2.1ポイント上回っている。
- ・数学は東京都を1ポイント下回り、全国を4ポイント上回っている。
- ・英語は東京都の平均IRTSコアを25ポイント、全国を53ポイント上回っている。

(2) 各教科の詳細

① 小学校

【国語】

分類		区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
				港区	東京都(公立)	全国(公立)
全体			13	69	65	60.9
学習指導要領の内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	4	73.2	70.4	66.8
		(2) 情報の扱い方に関する事項	2	62.5	56.7	52.3
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	0			
	思考力、判断力、表現力等	A 話すこと・聞くこと	3	74.2	70.0	65.8
		B 書くこと	2	※2 52.2	50.4	45.7
		C 読むこと	2	※1 75.5	68.8	65.9
評価の観点		知識・技能	6	69.6	65.8	62.0
		思考・判断・表現	7	68.3	64.1	60.1
		主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式		選択式	9	71.2	66.4	61.9
		短答式	2	68.7	66.5	62.6
		記述式	2	58.9	56.3	54.9

小学校国語では、すべての区分で東京都、全国を上回っています。特に昨年度は区の最低値であった「思考力・判断力・表現力等」のうち「読むこと」の平均正答率は、75.5%※1であり、全区分の中で最も高くなっています。

「書くこと」の平均正答率は52.2%※2であり、東京都を1.8ポイント、全国を6.5ポイント上回っていますが、分類「学習指導要領の内容」では、区の最低値であることから指導の工夫が必要です。具体的には、国語の授業だけではなく、他教科・帯時間等での書く機会を日常化することが大切となります。短答～100字程度程度のミニ作文を計画的(ふりかえり等)に書かせる、主張+理由+具体例(根拠)の型を徹底させていく「型(フレームワーク)」などが有効な手立てとなります。

一方、0問から5問正答した児童は全体の14.9%でした。授業中の個別支援に加え、タブレット端末等を活用して一人ひとりの学習状況やつまずきを把握し、実態に応じた課題を提示することが重要です。また、短い文章を書く活動や要点を整理してまとめる活動を継続的に取り入れることで、個別最適な学びの充実を図る必要があります。

【算数】

分類	区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
			港区	東京都(公立)	全国(公立)
全体		16	71	63	56.4
学習指導要領の領域	A 数と計算	8	75.4	68.0	61.1
	B 図形	4	72.6	63.4	55.3
	C 測定	1	86.8	82.9	78.1
	C 変化と関係	3	※3 60.0	49.9	41.1
	D データの活用	4	61.7	53.9	48.6
評価の観点	知識・技能	12	74.9	67.1	60.1
	思考・判断・表現	4	※4 58.7	51.1	45.4
	主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式	選択式	5	69.8	62.6	56.0
	短答式	8	74.8	66.7	59.7
	記述式	3	62.0	54.3	48.5

小学校算数では、全ての区分において東京都、全国を上回っています。特に学習指導要領の領域のうち「C 変化と関係」は、東京都と比較すると10.1ポイント、全国と比較すると18.9ポイントと昨年度に引き続き大きく上回っています。※3

「評価の観点」のうち、区分「思考・判断・表現」は東京都、全国を上回っていますが、平均正答率が58.7%※4で全区分の中で最も低い数値です。「思考・判断・表現」を高めるには、式や答えの妥当性だけを重視せず、「なぜ、その式になるのか」「どうしてその方法を選んだ」など思考の過程を言語化、可視化する学習活動が不可欠となります。例えば、日常的に言葉・式・図(数直線や面積図など)を関連付けて児童に説明させることが有効です。

一方で、0問から5問正答した児童は全体の11%でした。理解度や習熟の状況には個人差があることから、タブレット端末等を活用して学習状況を適切に把握し、特につまずきの見られる児童に対しては、個別に応じた課題の提示や反復学習を行うなど、一人ひとりの実態に応じた学びを充実させることが重要です。

② 中学校

【国語】

分類		区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
				港区	東京都（公立）	全国（公立）
全体			15	66	68	63.9
学習指導 要領の 内容	知識及び 技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	5	65.9	66.2	63.0
		(2) 情報の扱い方に関する事項	1	※5 73.5	74.6	70.4
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	0			
	思考力、 判断力、 表現力等	A 話すこと・聞くこと	3	67.2	68.1	63.9
		B 書くこと	3	※6 66.6	70.5	67.4
		C 読むこと	3	63.1	64.2	59.7
評価の観点		知識・技能	6	67.1	67.6	64.2
		思考・判断・表現	9	65.6	67.6	63.7
		主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式		選択式	9	76.0	76.5	72.7
		短答式	3	57.5	58.5	55.8
		記述式	3	45.6	50.0	45.5

中学校国語では、全体の平均正答率は東京都を2ポイント下回り、全国を2.1ポイント上回っています。学習指導要領の内容別に見ると、**区分「(2)情報の扱い方に関する事項」は東京都を1.1ポイント下回っていますが、全国の平均正答率を3.1ポイント上回っており、「学習指導要領の内容」の中では高い正答率となっています。※5**

区分「B書くこと」は東京都の平均正答率を3.9ポイントポイント下回り、全国平均も0.8ポイント下回っており、全分類の中で唯一全国平均を下回る結果となりました。※6昨年度も同様の傾向が見られたことから、重点的な指導が必要です。指導に当たっては、条件に合わせた文章を書く際に、いきなり本文を書かせるのではなく、構想メモの作成などによる事前整理を徹底することが有効です。説得力のある文章を記述する力を育成するため、主張・理由・具体例を明確にした文章作成トレーニングを継続的に行うことが重要です。

一方で、0問から6問正答した児童は全体の17.2%でした。特に「書くこと」に課題が見られる生徒に対しては、文章構成の型を示したワークシートの活用や、短い記述課題を繰り返し実施することで、文章を書くことへの負担感を軽減しながら記述力の向上を図る必要があります。

【数学】

分類	区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
			港区	東京都（公立）	全国（公立）
全体		16	61	62	57.0
学習指導要領の 領域	A 数と式	5	69.7	71.0	67.8
	B 図形	4	54.6	56.9	48.7
	C 関数	3	58.3	59.2	54.8
	D データの活用	4	※7 57.9	57.7	53.5
評価の観点	知識・技能	12	67.0	67.4	63.0
	思考・判断・表現	4	※9 42.4	45.8	39.1
	主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式	選択式	3	61.4	63.1	59.3
	短答式	9	※8 68.8	68.8	64.2
	記述式	4	※9 42.4	45.8	39.1

中学校数学では、「Dデータの活用」を除く全ての区分で東京都の平均正答率を下回っていますが、全国と比較すると全ての区分で上回っています。

学習指導要領の領域別に見ると、「Dデータの活用」は、昨年度は東京都及び全国**の平均正答率を下回っていましたが、今年度は大きく改善しました。※7**また、**問題形式別では、「短答式」の平均正答率が東京都と同率で、全国平均を4.6ポイント上回っており、高い水準を維持しています。※8**

なお、「思考・判断・表現」と「記述式」は、いずれも全区分の中で最も平均正答率が低くなっています。特に「記述式」は昨年度も最も低い正答率であり、**※9**継続的な課題となっています。

このことから、「思考・判断・表現」及び「記述式」に関する重点的な取組や指導が必要です。指導に当たっては、単に計算結果や答えを求めるだけでなく、「なぜその解法を選択したのか」などの考えを言葉で説明したり、記述したりする場面を日常的に設定し、習慣化することが重要です。

一方で、0問から4問正答した児童は全体の14.6%でした。特に「思考・判断・表現」や「記述式」に課題が見られる生徒に対しては、タブレット端末等を活用しながら、一人ひとりのつまづきに応じた課題の提示や反復学習を行うとともに、記述の型を示したり、教師が個別に助言したりするなど、個別最適な学びの充実を図ることが必要です。

問題番号	問題の概要	出題の趣旨	学習指導要領の領域					評価の観点			問題形式			正答率(%)			問題の難易度
			(1) 聞くこと A	(2) 読むこと B	(3) 話すこと 「やり取り」 C	(4) 話すこと 「発表」 D	(5) 書くこと E	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	選択式	短答式／口述式	記述式／口述式	港区	東京都 (公立)	全国 (公立)	
5	住みやすいまちづくりについての発表を聞き、話し手が最も伝えたいことを選択する	社会的な話題について、話を聞き、要点を捉えることができるかどうかをみる	○						○		○			71.5	63.9	55.6	4
10(1)	インターネットの使用に関する文章を読み、書き手が最も伝えたいことを選択する	社会的な話題について、短い文章を読み、要点を捉え、考えとその理由を書くことができるかどうかをみる		○					○		○			63.2	56.0	47.5	4
10(2)	インターネットの使用に関して読んだことについて、考えとその理由を書く	社会的な話題について、短い文章を読み、要点を捉え、考えとその理由を書くことができるかどうかをみる					○		○				○	42.9	35.6	27.8	5
11①	与えられた情報に基づいて、留学生の昨日の出来事を説明する英文を書く	音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けているかどうかをみる					○	○				○		76.9	68.6	58.9	3
13	留学生との交流会で一緒にしたいことを1つ取り上げ、その理由を書く	日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、まとまりのある文章を書くことができるかどうかをみる					○		○				○	64.5	54.0	44.0	4
2	ショッピングセンターでのアナウンスを聞き、行くべき階を選択する	日常的な話題について、目的に応じて、必要な情報を聞き取ることができるかどうかをみる	○						○		○			80.6	80.7	78.5	3
14	学校で普段行うことを1つ取り上げ、それについての説明を書く	日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、まとまりのある文章を書くことができるかどうかをみる					○		○				○	39.7	37.9	27.8	4

※全14問から特徴的な問題を取り出しています。

※学習指導要領の領域(3)話すこと「やり取り」、(4)話すこと「発表」は実施しておりません。

英語では、全14問のうち、東京都の正答率を12問、全国の正答率を全14問で上回っています。特に、次の5問では東京都及び全国との差が7.2～20.5ポイントと大きく、高い正答率が見られました。

「住みやすいまちづくりについての発表を聞き、話し手が最も伝えたいことを選択する」

「インターネットの使用に関する文章を読み、書き手が最も伝えたいことを選択する」

「インターネットの使用に関して読んだことについて、考えとその理由を書く」

「与えられた情報に基づいて、留学生の昨日の出来事を説明する英文を書く」

「留学生との交流会で一緒にしたいことを1つ取り上げ、その理由を書く」

一方で、東京都の正答率を下回った問題は次の2問でした。

「ショッピングセンターでのアナウンスを聞き、行くべき階を選択する」

「学校で普段行うことを1つ取り上げ、それについての説明を書く」

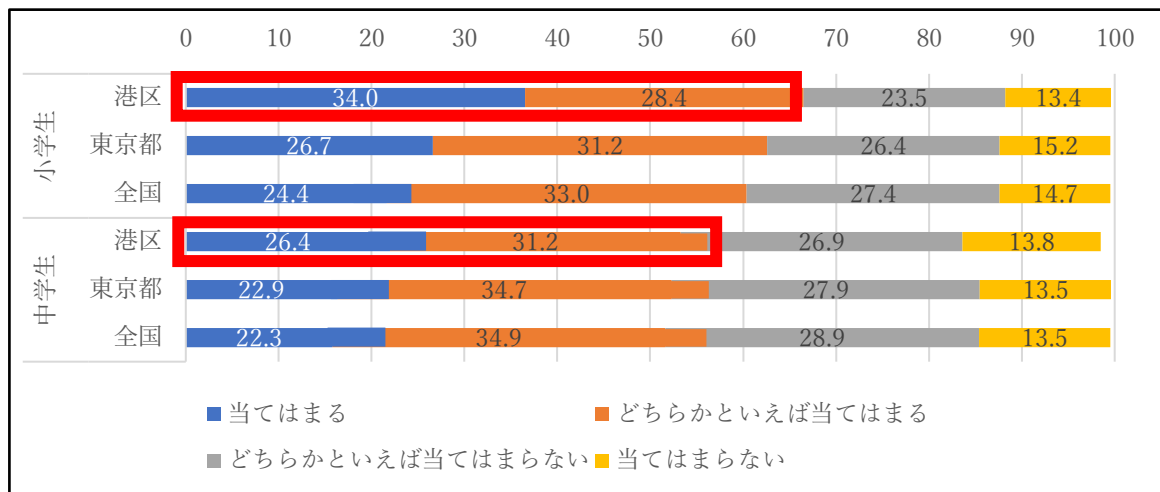
領域別に見ると、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」のいずれにおいても比較的高い正答率となっています。特に、「書くこと」に関する問題では高い正答率が見られ、自分の考えや理由を英語で表現する力が身に付いていることが伺えます。現時点では大きな課題は見られませんが、さらに英語によるコミュニケーション能力を高めるためには、「学んだ英語を実際のコミュニケーションの場面で活用する機会をどのように設定するか」を意識した指導を充実させていくことが重要です。ペア活動やスピーチ、ライティング活動などの言語活動を継続的に取り入れるとともに、生徒が自らの表現を振り返り、より適切な表現へと改善できるよう、教師による助言や相互評価の機会を充実させていくことが有効です。

3 質問紙に関する調査結果

(1) 国語科の学習について

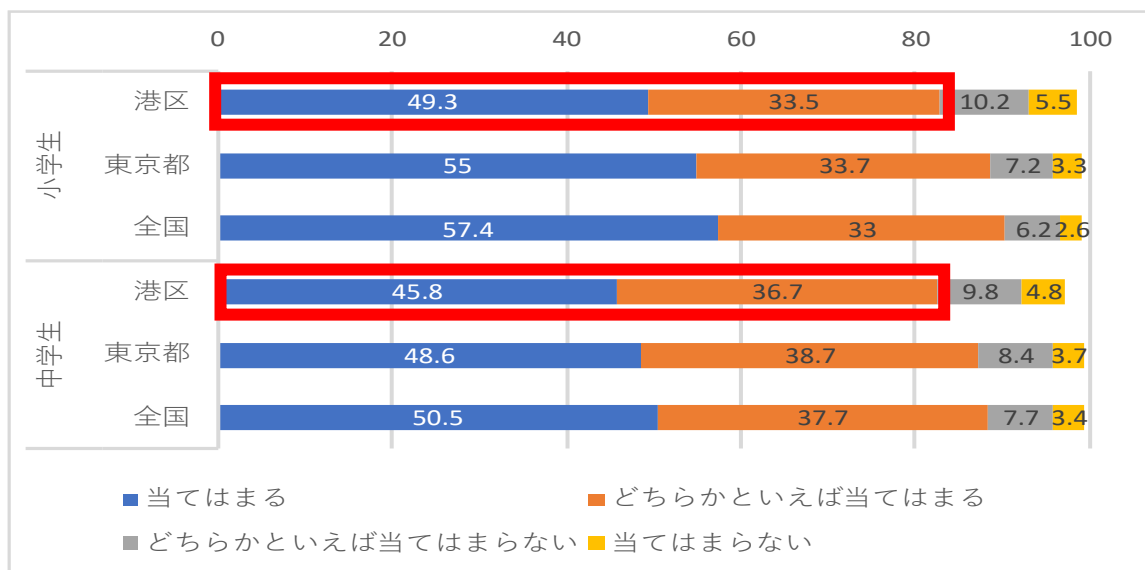
〔質問項目〕国語の勉強は好きですか。

〔結 果〕



〔質問項目〕国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。

〔結 果〕



〔考 察〕

「国語の勉強は好きである」と回答した児童は62.4%、生徒は57.6%でした。いずれも東京都と同等以上で全国の割合を上回っており、特に小学校では東京都及び全国を約4ポイント上回っています。

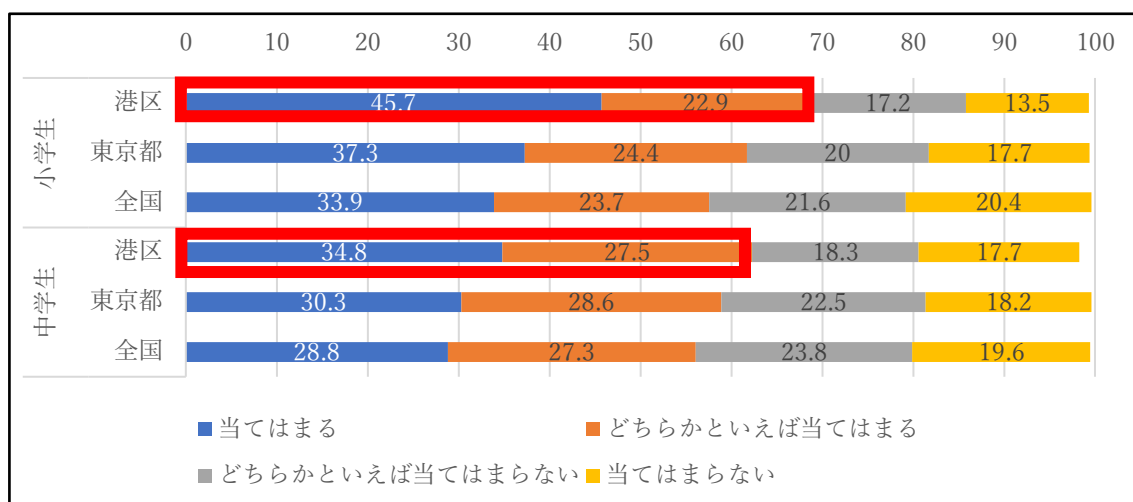
一方、「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つと思う」と回答した児童は82.8%、生徒は82.5%で、いずれも東京都及び全国の割合を下回っています。また、昨年度と比較すると約2～3ポイント減少しています。

国語の勉強が好きと回答している児童・生徒が東京都、全国の割合を上回っているにもかかわらず、役に立つと思う児童・生徒は下回っています。要約や比較、根拠を示した説明、文章の読解、話し合いによる考えの深化など、国語科で育成する資質・能力が実社会において活用される場面を意識的に取り上げ、学習内容と社会とのつながりを関連付けながら指導していくことが求められます。

(2) 算数科・数学科の学習について または算数・数学教育について

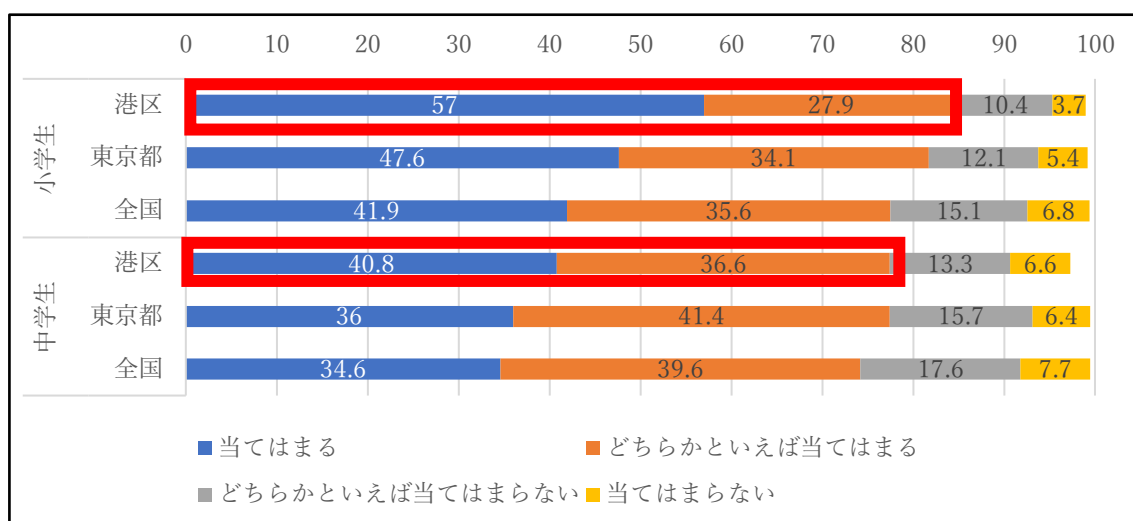
〔質問項目〕 算数・数学の勉強は好きですか。

〔結 果〕



〔質問項目〕 算数や数学の授業の内容はよく分かりますか。

〔結 果〕



〔考 察〕

「算数の勉強が好きである」と回答した児童は68.6%、「数学の勉強が好きである」と回答した生徒は62.3%であり、いずれも東京都及び全国の割合を上回っています。特に小学校では、東京都及び全国と比較して約7～11ポイント高い結果となりました。

また、「算数や数学の授業の内容はよく分かる」と回答した児童は84.9%、生徒は77.4%でした。小学校では東京都及び全国の割合を約3～7ポイント上回っており、中学校では東京都と同程度で、全国と比較すると約3ポイント上回る結果となりました。

これらの結果から、児童・生徒ともに算数・数学に対する肯定的な意識が高く、授業内容についても十分に理解できていることが伺えます。

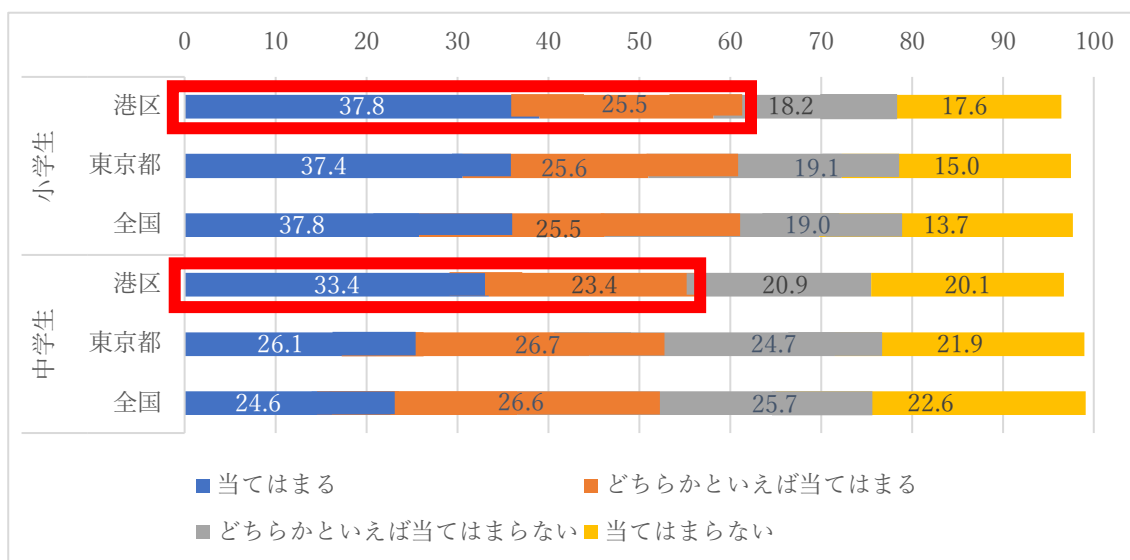
その要因として、小学校から中学校まで一貫して実施している習熟度別・少

人数指導の充実に加え、1人1台タブレット端末を活用した個別最適な学びの推進、さらには中学生を対象とした希望制補習事業「みんなとゼミナール」による授業外学習支援の充実など、継続的な取組の成果が表れているものと考えられます。

(3) 英語の学習について または英語教育について

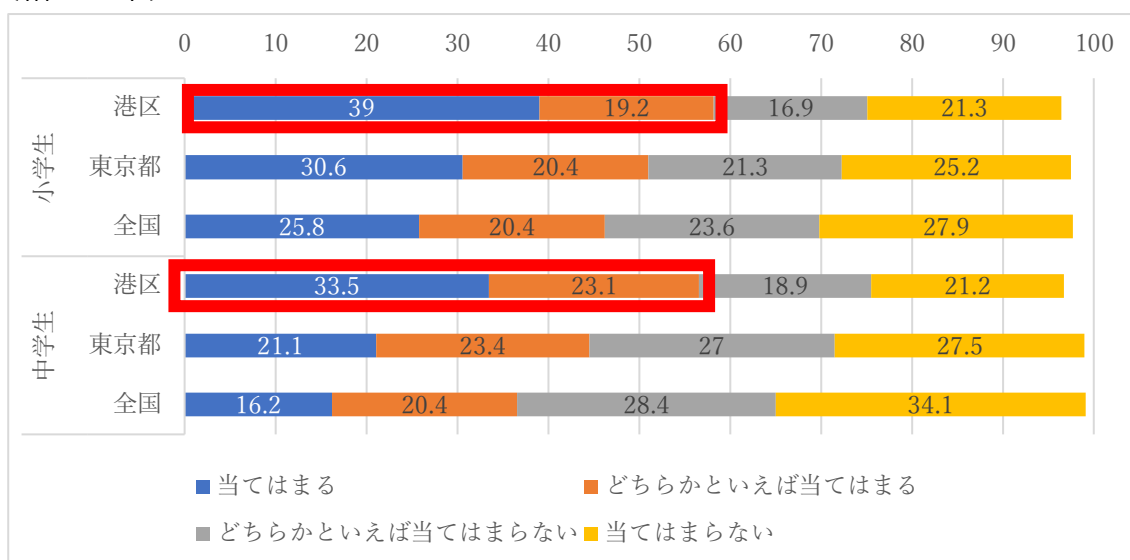
〔質問項目〕 英語の勉強は好きですか。

〔結 果〕



〔質問項目〕 これまで、学校の授業以外で英語を使う機会がありましたか。(地域の人や外国にいる人と英語で話す、英語で手紙や電子メールを書く、英語のテレビや動画、ホームページを見る、オンラインで他者と英語で交流する、英会話教室に通うなど)

〔結 果〕



「英語の勉強は好きである」と回答した児童は62.3%で東京都を上回り全国と同等の数値となっています。生徒は56.8%で東京都及び全国の割合を上回っています。英語学習に対する関心や意欲の高さが伺えます。

また、「これまでに学校の授業以外で英語を使う機会がある」と回答した児童は58.2%、生徒は56.6%であり、いずれも東京都及び全国の割合を上回っています。特に中学校は東京都を約12ポイント、全国を約20ポイント上回っており、英語に触れたり活用したりする機会が比較的多いことが伺えます。

これらの結果から、児童・生徒は、これまでの英語科・国際科の学習を基盤として、学校内外で英語に接する機会を比較的多く有しており、英語学習への関心や意欲の向上につながっていることが伺えます。また、英語を実際に使用する経験が、英語によるコミュニケーションへの積極性や自信の育成にも寄与しているものと考えられます。

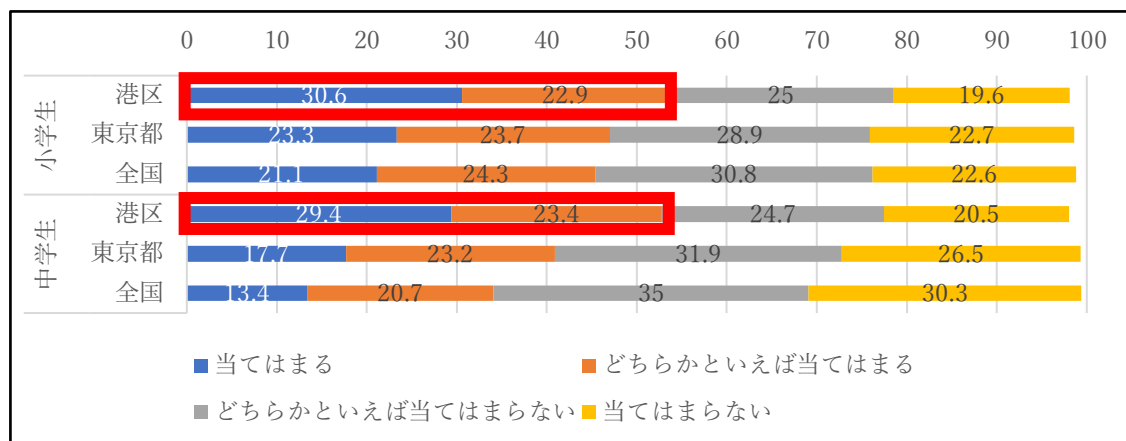
(3) 特徴的な項目について

【東京都・全国と比較し、数値が高かった項目】

① 英語学習と将来の結びつきについて

〔質問項目〕 将来、積極的に英語を使うような生活をしたり、職業に就いたり
したいですか。

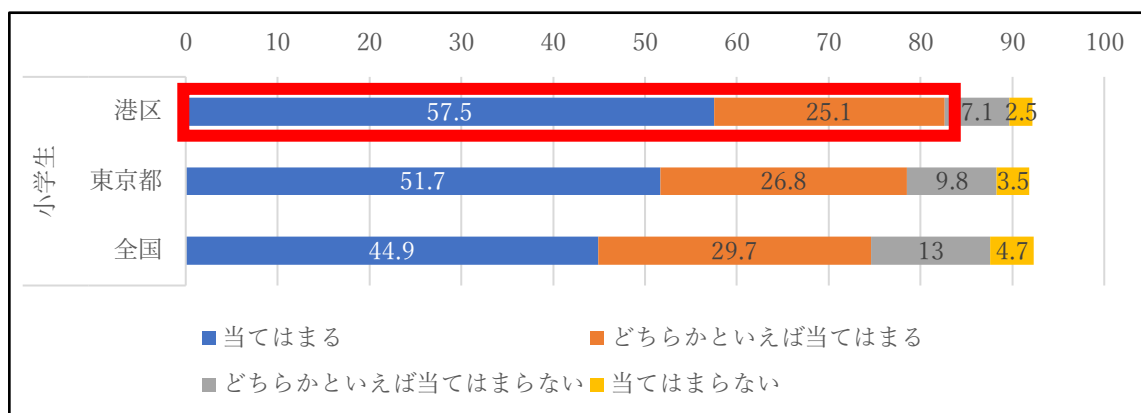
〔結 果〕



② ICT機器を使用した学習について(小学校)

〔質問項目〕 あなたはPC・タブレットなどのICT機器を使って学校での活動
でプレゼンテーション(発表のスライド)を作成することができる
と思いますか。

〔結 果〕



①英語学習と将来の結びつきについて

「将来、積極的に英語を使ったり職業に就いたりしたい」と回答した児童は53.5%、生徒は52.8%で、どちらも東京都と全国の割合を大きく上回っています。特に中学校では、東京都より11.9ポイント、全国より18.7ポイント上回っています。

この背景には、ネイティブ・ティーチャーを常備配置するなど早期から日常的に英語に触れる環境を整備してきたことがあると考えられます。港区が独自に策定した国際理解教育プログラムの一環として、中学校におけるシンガポールへの海外修学旅行や、小・中学校のオーストラリア海外派遣、大使館との交流活動に加え、TGG (Tokyo Global Gateway) での体験的な学習など、英語を実際のコミュニケーションの手段として活用する機会を設けていることも、大きな要因の一つと考えられます。

②ICT機器を使用した学習について(小学校)

「自分がPC・タブレットなどのICT機器を使って学校活動でプレゼンテーションを作成することができると思う」と回答した児童は82.6%で、東京都より4.1ポイント、全国より8ポイント上回っています。なお、中学校は東京都及び全国と同程度の数値でした。

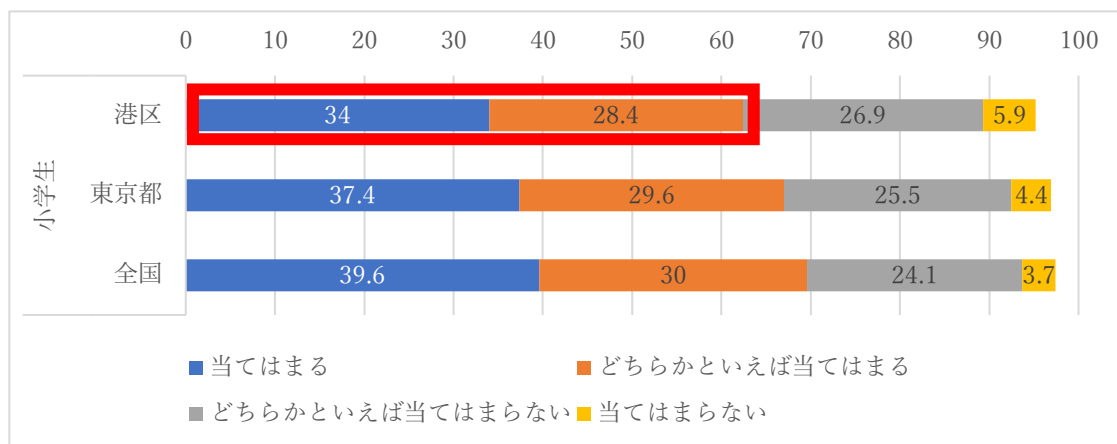
港区では、ICTを効果的に活用した複線型授業「MINATOスタイル」を推進しており、児童が自ら課題を設定し、情報を収集・整理しながら考えをまとめ、それを他者に伝える学習活動を日常的に行っています。今後も、MINATOスタイルに基づくICTを活用した複線型授業の充実を図り、主体的・対話的で深い学びを一層推進するとともに、児童・生徒の学力向上に向けた取組を引き続き推進する必要があります。

【東京都・全国と比較し、数値が低かった項目】

① 学級について(小学校)

〔質問項目〕あなたの学級では、人と違う意見を言っても否定されないと思いますか。

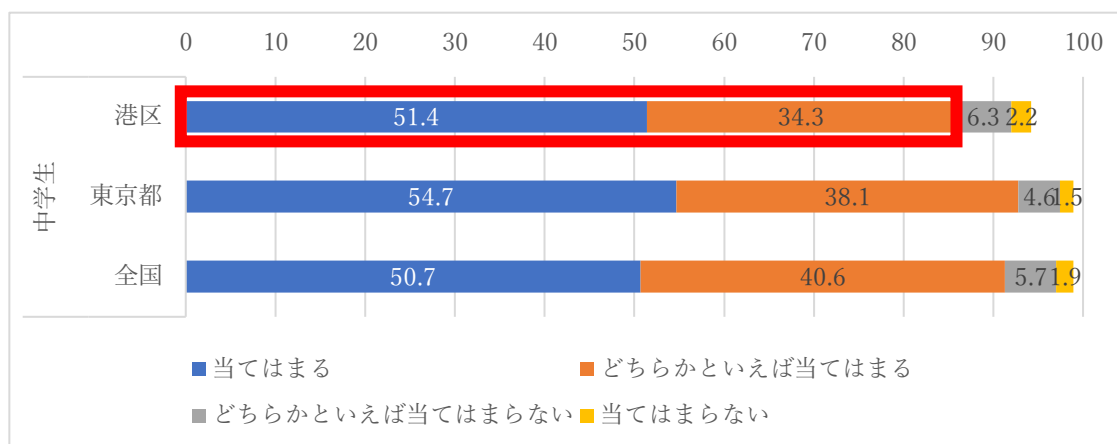
〔結 果〕



② 道徳授業について(中学校)

〔質問項目〕道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいますか。

〔結 果〕



①学級の様子について(小学校)

学級では、人と違う意見を言っても否定されないと思うと回答した児童は**62.4%で東京都、全国を下回っています。**

協働的な学習が日常的に行われる中で、児童が多様な考え方に触れる機会は増えているものの、「自分と異なる意見も尊重される」という学級の心理的安全性を十分に実感できていない児童が一定数存在していることが伺えます。児童一人ひとりが安心して自分の考えを表現できる学級づくりを一層推進することが課題です。そのためには、「どのような意見もまずは受け止める」「意見への反論と人格否定は異なる」「異なる考え方は学びを深める機会である」といった学級ルールを教員と児童が共有するとともに、互いの考えを認め合う対話的な活動の充実を図ることが重要です。

今後も、児童が安心して意見を表明し、多様な考えを受け入れながら学び合うことのできる学級づくりを推進していくことが重要です。

②道徳授業について(中学校)

道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいると回答した生徒は**85.7%で東京都と全国の割合を下回っています。特に東京都の割合とは7.1ポイント下回っており、全質問項目中で最も大きな差となっています。**

生徒同士が互いの考えを交流する機会は確保されているものの、「自分の考えが深まった」「他者の意見を通して新たな気づきが得られた」といった、学びの実感を十分に得ることができていない状況が考えられます。学習指導要領で示されている「考え、議論する道徳」の実現に向けては、単に意見を発表し合うだけでなく、多様な価値観に触れながら自己の生き方について考えを深める学習を充実させることが重要です。そのため、ジレンマ教材や答えが一つに定まらない事例を活用し、自分とは異なる立場や価値観について考えたり議論したりする場面を設定することが求められます。

4 質問紙調査と平均正答率とのクロス集計（一部抜粋）

- （１）普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、スマートフォンや携帯電話、パソコン、タブレット、ゲーム機、テレビ等（以下、「スマートフォン等」）で SNS や動画視聴などをしますか（スマートフォン等を使って学習する時間やゲームをする時間は除く）

<児童が回答した選択肢別の平均正答率>

選択肢		児童数	児童数の割合 (%)	平均正答率 (%)	
				国語 (13問)	算数 (16問)
1	4時間以上	193	12.2	54.8	55.5
2	3時間以上、4時間より少ない	156	9.9	62.3	61.8
3	2時間以上、3時間より少ない	261	16.6	69.0	69.7
4	1時間以上、2時間より少ない	337	21.4	69.6	71.9
5	30分以上、1時間より少ない	270	17.1	74.0	77.1
6	30分より少ない	235	14.9	78.2	81.5
7	スマートフォン等を持っていない	120	7.6	75.8	79.5

<生徒が回答した選択肢別の平均正答率>

選択肢		生徒数	生徒数の割合 (%)	平均正答率 (%)	
				国語 (15問)	数学 (16問)
1	4時間以上	196	28.7	60.3	52.6
2	3時間以上、4時間より少ない	136	19.9	66.9	62.3
3	2時間以上、3時間より少ない	169	24.8	72.0	66.7
4	1時間以上、2時間より少ない	115	16.9	67.5	63.4
5	30分以上、1時間より少ない	38	5.6	71.8	71.7
6	30分より少ない	16	2.3	62.7	67.5
7	スマートフォン等を持っていない	10	1.5	71.9	69.4

正答率が高いのは「全く使わない層」ではなく、「30分から2時間未満の層」であることから、スマートフォン等のデジタル機器を一律に排除するのではなく、学習や睡眠とのバランスを保ちながら適切に活用する情報モラル教育を推進することが重要です。

また、家庭における利用時間や利用ルールは児童・生徒の生活習慣と密接に関わることから、学校と家庭が課題意識を共有しながら取り組む必要があります。そのため、情報モラル教育の充実に加え、家庭における利用時間や利用場面に関するルールづくり、就寝前の使用の見直しなどについて啓発を行い、学校と家庭が連携して児童・生徒の望ましいデジタル機器の利用習慣を育成していくことが重要です。

- (2) 学校の授業時間以外に、普段、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか。
(電子書籍の読書も含む。教科書や参考書、漫画や雑誌は除く)

<児童が回答した選択肢別の平均正答率>

選択肢		児童数	児童数の割合 (%)	平均正答率 (%)	
				国語 (13問)	算数 (16問)
1	2時間以上	137	8.7	74.3	74.5
2	1時間以上、2時間より少ない	163	10.3	77.0	74.9
3	30分以上、1時間より少ない	323	20.5	70.4	74.2
4	10分以上、30分より少ない	309	19.6	73.1	75.6
5	10分より少ない	205	13.0	64.7	66.7
6	全くしない	274	17.4	62.4	63.5

<生徒が回答した選択肢別の平均正答率、平均IRTスコア>

選択肢		生徒数	生徒数の割合 (%)	平均正答率 (%)		平均IRTスコア
				国語 (15問)	数学 (16問)	英語3技能
1	2時間以上	45	6.6	65.7	60.1	552
2	1時間以上、2時間より少ない	45	6.6	70.2	66.8	599
3	30分以上、1時間より少ない	85	12.5	66.6	65.5	564
4	10分以上、30分より少ない	112	16.4	71.1	65.6	574
5	10分より少ない	103	15.1	66.8	61.0	548
6	全くしない	195	28.6	65.7	60.5	547

児童・生徒ともに、一定時間読書に取り組んでいる層の平均正答率が比較的高い傾向が見られます。児童では、国語は「1時間以上、2時間より少ない」層が77.0%で最も高く、算数は「10分以上、30分より少ない」層が75.6%で最も高くなっています。また、「全くしない」層は国語62.4%、算数63.5%といずれも最も低い結果となっています。

生徒では、「1時間以上、2時間より少ない」層が国語70.2%、数学66.8%、英語の平均IRTスコア599となっており、3教科を通して比較的高い結果となっています。一方、「全くしない」層は国語65.7%、数学60.5%、英語の平均IRTスコア547となっており、読書習慣のある生徒との差が見られます。

読書は語彙力や読解力の向上に加え、文章を読み取り、自分の考えを整理する力の育成にもつながることから、こうした読書習慣が各教科の学習に好影響を与えている可能性が考えられます。

一方で、「2時間以上」の層が必ずしも最も高い結果となっていないことから、単に読書時間の長さだけでなく、家庭での学習習慣、生活リズムなど、複数の要因との関連について考える必要があります。

今後は、学校図書館の活用や朝読書、読書記録の活用などを通して、児童・生徒が無理なく継続的に読書に親しむ習慣を身に付けられるよう支援するとともに、家庭とも連携しながら、児童・生徒が継続的に読書に親しむ環境づくりを進めることが重要です。